

三俣診療所における診療活動と登山者 向け講習の向上を目指して

代表者 露 口 悠 太 (医学部医学科 4 年)

1. 目的と概要

このプロジェクト事業は、北アルプスの三俣山荘に併設された診療所で夏期に行われている診療ボランティアを充実させるために、下界との連絡体制を整え、登山者へ登山における医学的知識と技術の普及活動を実施し、安全を確保することを目的とします。

2. 実施期間 (実施日)

平成 28 年 7 月 23 日から 平成 28 年 8 月 27 日まで

3. 成果の内容及びその分析・評価等

私たち三俣診療班が山荘に併設されている診療所で診療ボランティアを毎年実施している中で、下界との連絡体制に改善の必要性を感じたのでこのプロジェクト事業が持ち上がりました。三俣診療班は、医師が診療所にいない時の急患や薬剤の不足、その他のトラブルにおいては、学生が下界（香川や岡山の部員、顧問など）と協議して対応することになっています。診療所には平成 21 年度の本事業で導入された衛星電話がありましたが、現在では調子が悪く常に使用できるわけではありませんでした。そのため下界との連絡体制に非常に不安がありました。また古い衛星電話はメーカーの保守サービスが終了しており修理は不可能でした。このような状況を改善するため、診療所に新しい衛星電話を導入しました。新しい衛星電話は古いものに比べて悪天候でも繋がりがやすく、音声聞き取りやすいものでした。これにより下界との連絡を密にストレスなくとることができ、部員の安全と診療活動の質の向上が実現できました。三俣診療班の継続には、いらっしゃる登山者、患者さんの安全はもちろんのこと部員の安全を守ることも非常に大切です。この点で今後不安のあった古い衛星電話に加えて新しい衛星電話を導入できたことは非常に意義のあることでした。

また今年度本事業により購入した三角巾を用いることで、登山者に向けての講習会の質を例年以上に高めることができました。今年度導入した三角巾を配布し、実際に捻挫

の応急処置を登山者に体験してもらった講習会は大いに盛り上がり大変好評でした。三俣診療班では登山技術の向上や連絡などを目的に日帰りで周辺の山荘を往復しているのですが、その道中ですれ違った登山者に「昨日講習会をやっていた香川大学の方ですか？非常に勉強になりました。」といったような声をかけていただいた部員が沢山いたほどです。本来は、ほるナビ（消しゴムハンコ）で三角巾に救急時の三角巾の使用法と大学名を印字し講習会で配布する予定だったのですが、物品到着時期の関係で今年度は通常の三角巾を配布することになりました。山荘レストランを借りての講習会は捻挫、熱中症、低体温症、高山病の4テーマで基本的に診療期間中2日に1回の頻度で13回開催され1回の参加者は会場が毎回ほぼ満員で25人程度、活動期間を通して約300人でした。



衛星電話での連絡風景
(診療所にて)



講習会の実施風景
(山荘レストランにて)

4. この事業が本学や地域社会等に与えた影響

このプロジェクト事業で連絡体制を整えたことにより、平常時はもとより医師不在時の急患、薬剤の不足、その他運営上の問題が発生したときの下界への連絡が以前より円滑になり、診療の質の向上と私たち診療班員の安全の向上の両方が実現しました。

また講習会では登山者に対しても登山中に潜む危険因子について考えてもらう場を提供することができ、その対策についても理解し身に着けてもらう機会となりました。とりわけ経験が浅いために対策が不十分で気軽に登山に出掛けている登山者にとっては、自ら身の安全を考えて防ぐことの一助となったものと考えます。

そして登山者への講習会の中で自己紹介をする際に、香川大学の学生が診療所の活動に係わっていることを登山者の皆さんに知っていただけたこともあり、山の上で「香川大学の学生さんですか？」と声をかけていただける機会が増えました。三俣周辺山域の登山者の中では三俣診療班、香川大学の知名度が年々向上しているのが実感できる出来事でした。また県警からの感謝状、患者さんからの感謝の手紙もいただいています。

5. 自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

三俣診療班の活動は、学生が積極的に診療の補助を行い、医療への好奇心を養い、その環境下での役割の重要性とやりがいを感じることのできる貴重な機会となっています。実際の現場で患者を相手に責任のある役割を担うことは診療活動の主力である低学年では得ることの難しい経験です。加えてボランティア活動を通して実際に目の前の患者さんに感謝されることは学生にとって非常に大きな喜びで、香川大学の学生として、将来の医療従事者としての社会貢献への意識と責任感の向上につながったと思います。また学生同士だけでなく医師や看護師とコミュニケーションを取ることもでき、将来の自らの姿を描き様々な選択肢を思い浮かべるきっかけともなっています。

山岳医療ではその特殊な環境から、限られた道具、限られた人員で診療を行っていく必要があります。酸素ボンベ等の医療器材には限りがあり、また天候によってはヘリでの救急搬送も難しい場合があります。経験豊富な医師ですら判断を悩み、そして決断する姿に医療者としての責任の重さを感じました。そのような経験を通して医の原点に触れることは責任感と学びのモチベーションを学生に与え大変有意義なものです。

また将来の医療従事者として一般の方に分かりやすく医学知識を伝えることはとても重要な能力です。講習会では登山者に向けてプレゼンテーションするという貴重な経験を通して人前で伝える能力を向上させるとともに、自分たちの医学的知識を増やすこともでき、有意義な活動であったと考えています。

6. 反省点・今後の抱負（計画）・感想等

積極的に診療活動の補助をできるように、学生が診療期間外にもっと勉強をしておくべきだと考えられます。今までも学生独自の勉強会や日本赤十字社をお呼びしての救急講習は実施されていたのですが、年に数回ほどで、まだまだ不十分だと考えられます。今後は勉強会の頻度を増やし、今までには取り入れたことの無いような内容も勉強会に取り入れ、学生の知識の量を増やしていきたいです。特に近年虫刺されが原因で診療所を訪れる登山客が増加しているので、虫刺されに関する勉強会を実施したいと考えています。

講習会についても、準備不足が多少見受けられました。来年からは講習会の内容を班員がより勉強していくようにすると共に、診療期間外にプレゼンテーションの準備を済ませておく必要を感じました。講習会で難しい質問をいただくことがあるので、質問の内容を蓄積しそれに対する回答を部員で共有することを進めています。加えて来年度には三俣診療班出身の医師と学生が参加する講習会の内容についての勉強会を予定しています。また本事業の中間報告会に参加して活動実績としての具体的な記録や数字の重要性を実感したので、これについても来年度は収集しようと思います。

本事業の予算執行についても反省がありました。三俣診療班は夏が主な活動時期のため物品到着からの準備期間が非常に短いという問題があります。今回のほるナビが活用できなかった原因もそこにあります。準備期間をふまえた申請が必要だったと反省しています。ほるナビについては来年度の活動で活用することを考えています。

今年度の活動反省を活かして、来年度はよりよい診療活動を目指していきます。

7. 実施メンバー

代表者 露口 悠太（医学部4年）

構成員 井上 智之（医学部4年）

佐藤 芙美佳（医学部3年）

高島 堯（医学部2年）

舟木 大地（医学部2年）

毛利 友輔（医学部4年）

鶴江 唯里（医学部3年）

片山 大奨（医学部2年）